

[第14回]

我が血液の遥かなる血管内旅路：
最善の夢—死してもなお

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科システム血拴制御学

Ikuro Maruyama 丸山征郎

本棚の整理をしていたら、『数学は最善世界の夢を見るか?—最小作用の原理から最適化理論へ』[イーヴァル・エクランド 著, 南條郁子 訳, みすず書房, 2009年]というタイトルの本が見つかった。この本は、18世紀中頃、ベルリン科学アカデミーの院長モーベルテュイ (Pierre-Louis Moreau de Maupertuis : 1698-1759) が、光が水面に入る時に屈折する現象の観察から、「自然の中に何らかの変化を引き起こすのに必要な作用の量は可能なかぎり小さい」という原理があるのだと結論したことの是非を軸に展開されている。モーベルテュイは自分の観察に基づき、「世界は合理的に作られており、それは創造主としての神の叡智の賜物である」としたのである (結局この現象は、光の水に対する屈折率の結果であることが後年証明され、誤りであることがわかるのであるが)。

パラパラとめくると、赤鉛筆の線や付箋ふせんがところどころに貼ってあり、そこを読み返すと、少しずつ内容を思い出してきた。内容は「数学」を「生命」と置き換えて読むことも可能であると思えたので、以下、そのような視点から血管生物学を眺めてみたい。特に、血球の死とその意味論に関して。

本バイオエッセイから眺める「数学は最善世界の夢を見るか?」—最小作用の原理から最適化理論へ—

この本の冒頭、「はじめに」の部分に、私は丸印を付けている。少し長いが引用する。

幕が上がる。がらんとした舞台。バケツの近くで掃除婦が床に膝をつき、雑巾がけをしている。やがて終わり、不意に口を開く。

「あたしゃ顔はすすけとるし、肌もひび割れとるかもしれん。そんでも手は白い。ほれ、旦那! 手が白いのは、生まれてこのかた水に浸けっぱなしだったからじゃ」

彼女の名はラ・サグイン。アントニーヌ・マイエの劇のヒロインである。ラ・サグインは観客に向かって、人間の不幸を織りなす日々の労苦について語り、不幸を耐えやすくするために想像力が生み出したあらゆる手立てについて語る。というのも、物事はどうしてもこうでなければならないというわけではなく、つらいこの世もほんの少しのことで天国に変わるように思え